

デカルト身体論

村上吉男

身体の〈sens (感覚)〉についていえること

筆者はデカルトが〈真理の探求〉をはじめ、「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」なる各用法の認識論において、精神の諸能力をすべて身体に向かわせる、「精神優位」の観念を取り入れ、そこからいかなる「新たな能力」が導出され得るかを問い、そのいずれがより人間たるべき能力なのかを思い巡らした、シモーヌ・ヴェーユにいわせると、〈理想を夢見続ける思想家〉⁽²⁷⁹⁾であると読む。ところが身体のことを、たとえば『人間論』、『方法序説』(第五部)や『情念論』であれほど詳しく説きながらも、「日常的用法」の認識論にあってさえ、身体を前面に出して主張することがまるでない。そこでも当然上記した「精神優位」の観念が優先させられるからであろうが、しかしその精神の「新たな能力」はほとんど、この用法ではむしろのこと、「もう一つの真理の探求」でも、彼が打ち出し、筆者が小見出しに掲げる「身体の〈sens〉」(あるいは身体の〈imagination (想像)〉)⁽²⁸⁰⁾なしに組み立てられはしないというのにである。こうした疑問が即座に脳裏をかすめるは筆者ばかりではないにちがいない。

②④ Il est aisé de concevoir que les sons, les odeurs, les saveurs, la chaleur, la douleur, la faim, la soif, et généralement tous les objets, tant de nos autres sens extérieurs que de nos appétits intérieurs, excitent aussi quelque mouvement en nos nerfs, qui passe par leur moyen jusqu'au cerveau. ⁽²⁸¹⁾

音、香り、味、熱さ、痛み、飢え、渇きなど、一般にわたしたちの外的感覚と内的欲求のあらゆる対象がわたしたちの神経のうちに何らかの運動を引

き起こし、この運動が神経を介して脳にまで達することは容易に理解され得る。

②⑤ J'ajoute qu'elles (passions) se rapportent particulièrement à l'âme, pour les distinguer des autres sentiments qu'on rapporte, les uns aux objets extérieurs, comme les odeurs, les sons, les couleurs; les autres à notre corps, comme la faim, la soif, la douleur. ⁽²⁸²⁾ (括弧内は筆者)

情念がとくに精神に関係づけられるとわたしが付け加えるのは、一方で香り、音、色のような外的対象に関係づけられる感覚 (sentiments) という、他方で飢え、渇き、痛みのような身体に関係づけられる感覚 (sentiments) という情念をそのほかの感覚 (sentiments) から区別するためである。(括弧内は筆者)

筆者が身体を軽視できないと察知するのは、上記引用文②④が、すべての身体内外諸器官にそれぞれ〈あらゆる対象〉の一を「受容」させずに、身体の外的諸器官、いわゆる《五官(感)》で、〈音、香り、味、熱さ、痛み、色(引用文②⑤)〉という〈わたしたちの外的感覚 (sens extérieurs)〉と、身体の内的諸器官、いわゆる《内臓感覚(内的感覚)》で、〈痛み、飢え、渇き〉という〈わたしたちの内的欲求 (appétits intérieurs)〉とが生じてこないのをさすことにあり、この〈外的感覚と内的欲求〉の両方が、〈神経を介して脳にまで〉伝わり、さらに何度かの指摘のように、まずはときに〈脳〉の〈腺〉で〈sentiment〉に、次にときに〈脳本体〉で〈passion〉になろうが、その各〈腺〉や〈脳本体〉なる〈精神〉の「新たな能力」にすら、身体内外諸器官での〈外的感覚と内的欲求〉、すなわち筆者の小見出し語に代表される身体の〈sens(感覚)〉の産出が因となっていることにあるからである。要するにデカルトにとっても、〈精神〉の「新たな能力」にかかわるすべては本来、身体の「受容」運動とこれにときに応じよう〈わたしたちの神経のうちに何らかの運動を引き起こ〉すことではじまるのだ。〈何らかの運動〉とは「受容」運動を含意させるはむろんのこと、その「受

容」に対し、〈脳本体（理性的精神）〉を〈出〉て「働きかける」〈ressentir〉の〈運動〉でしかない。両〈運動〉のもとで、身体内外諸器官（の〈神経〉）に、内外〈対象〉からの〈音、香り、味、熱さ、痛み、飢え、渇き〉という確たる「新たな能力」が産出されるし、おのこの「新たな能力」が〈脳にまで達する〉ときもあるわけである。

そして引用文②⑤には〈情念（passions）〉と〈精神（âme）〉の語が記されるところから、引用文②④の身体内外諸器官での、〈外的感覚〉と〈内的欲求（内的感覚）〉を合わせていう身体の〈sens〉が〈脳〉に伝わった、その〈脳〉すなわち〈精神〉のことが明かされる。したがって繰返すまでもなく、②⑤は②④の身体の〈sens〉が〈脳（精神（âme）とみなされる脳）〉でいかになったかをデカルトが語るにある。それは筆者にとっては、身体の〈sens〉たる能力の名称が〈脳〉中の何らかの部位にて変えられるだけで、〈âme〉にてこの名称の変わった能力はしかし、身体の〈sens〉と本質的な相違をみせはしないと考えられるが、どうであろうか。以下はこの相違がみられぬことを示すであろう。最初に身体の〈sens〉が会う〈脳〉中の部位は、②⑤に書かれる、〈香り、音、色のような外的対象に関係づけられる感覚（sentiments）〉や〈飢え、渇き、痛みのような身体に関係づけられる感覚（sentiments）〉という両〈感覚〉を産出させる〈腺〉でなければならなかった。この産出経緯は〈腺〉に「受容」された、②④でいえば〈外的感覚と内的欲求（内的感覚）〉たる身体の両〈感覚（sens）〉に、〈sentir〉が「働きかける」ことにあつた。だから〈腺〉では、筆者のいう「身体の〈sens〉の〈sentiment〉化」⁽²⁸³⁾がみられるといい得たわけである。

次に両〈感覚（sentiments）〉がときに出会うであろう〈脳〉中の部位は〈脳本体〉であつた。なぜなら両〈sentiments〉のうち、〈細糸（神経）が結合したり、からまったり〉して⁽²⁸⁴⁾、〈腺（H）の表面に〉⁽²⁸⁵⁾表出する各〈sentiments〉がではなしに、別言すると〈細糸（神経）が互いに離れてい〉⁽²⁸⁶⁾た結果による各〈sentiments〉のみが、〈脳本体〉に「受容」されるならば、これらのおのこの、前号引用文の②①や②②から示したような〈vouloir〉、〈juger〉や〈considérer〉などがそれぞれ「働きかけ」ては、〈脳本体〉内でたとえば②①の〈逃走（弱気）〉なる〈passion〉が産出されたからである。

〈腺〉での〈sentiment〉と〈脳本体〉での〈passion〉のかかわりでは、〈腺〉の〈細糸（神経）が互いに離れてい〉る、そうしたあり様で〈腺〉が、要するにその〈神経〉が〈運動〉するのだから、本稿引用文②⑤を同②④の延長線上にあるとみるなかでの、「受容」と〈能動〉をさすこの〈運動〉は、両引用文に亘って、すべて〈神経を介して〉、身体としての〈sens（感覚）〉と〈精神〉としての〈sentiment（感覚）〉や〈passion（感覚すなわち情念）〉という各「新たな能力」を生み出すことが語られくると受け取るほかなかりう。そのあらゆる〈感覚〉には当然、〈外的感覚〉ばかりか、〈内的欲求（内的感覚）〉（②⑤にあっては〈身体〉）も含まれよう。またとりわけ〈sentiment〉や〈passion〉を産出した〈腺〉や〈脳本体〉ではそれぞれ、〈腺〉が〈精神（âme）〉と、〈脳本体〉が〈理性的精神（âme raisonnable）〉として捉えられていたがゆえに、②⑤に記される〈âme〉は〈理性的精神〉を指し示すしかなく、このとき〈腺〉の方は〈脳〉の一部位としての身体であって、〈精神〉とみられることはなかった。これを含め、要は筆者がこの引用文②④と②⑤に、三つの「新たな能力」（sens, sentiment と passion）に関することを読み込むうえは、今までそれらについて語ってきたことが論外にならないことを証明させるのである。

だが引用文②⑤中の〈そのほかの感覚（les autres sentiments）〉は何を物語るかがいまだ未解決であるし、〈そのほかの感覚〉をも〈情念〉といい得るのか問われる。これらを見るに、実は②⑤に続く文章を参考にする必要がある。

②⑥ J'ajoute aussi qu'elles (passions) sont causées, entretenues et fortifiées par quelque mouvement des esprits, afin de les distinguer de nos volontés, qu'on peut nommer des émotions de l'âme qui se rapportent à elle, mais qui sont causées par elle-même. ⁽²⁸⁷⁾ (括弧内は筆者)

情念が（動物）精気の何らかの運動に引き起こされ、持続され強められるとわたしがまた付け加えるのは、精神に関係づけられるはむろん、精神自身により引き起こされる、精神の情動（émotions）と名付けることのできる、この情念を、わたしたちの意志（volontés）から区別するためである。（括弧

内は筆者)

上記引用文②⑥は同②⑤と同様、デカルトが前号引用文①⑨⁽²⁸⁸⁾にて、〈情念〉が何により発生するかと質す、その何を再度説明した文章である。すなわちこれもすでに前号の註(255)や註(256)⁽²⁸⁹⁾の各引用語句で指摘済みの通り、②⑤の〈情念〉は〈腺の運動〉、換言すると〈神経の運動〉(序でにいうと、引用文②④はこの〈神経の運動〉に含まれた)によって、②⑥の〈情念〉は〈(動物)精気の運動〉によって発生するといえる。だから、〈腺(神経)の運動〉である②⑤の〈情念〉が〈そのほかの感覚(les autres sentiments)から区別〉される以上、〈そのほかの感覚〉は〈(動物)精気の運動〉によらなければならぬことが分ってくる。そこで〈そのほかの感覚〉が何か、また〈情念〉になぜなり得るのかをこれからみることになるわけである。

先きに結語しておく(というのは以下は前号で一度触れたことであって、引用文②⑤や②⑥を提示してはじめて可能な、その解答が今回なのだから)と、〈そのほかの感覚〉とは筆者のみるところ、前号引用文②③⁽²⁹⁰⁾の〈あらゆる欲求〉ないしは筆者が今回もとくに注目して問う〈affection(感情)〉であり、複数形である〈そのほかの感覚(les autres sentiments)〉には〈あらゆる欲求(appétits)とaffections〉(複数形)が充当させられるしかないし、筆者のわけでも〈affection〉をもって証明せんとする仕方にかかってはくるが、〈affection(そのほかの感覚の一)〉も〈(動物)精気の運動〉下における〈情念〉になるであろうということである。

筆者はここで、前段への解答に関連してこよう問題をいくつか取り上げてみる。まず、筆者が引用文②⑤のなかで、〈情念をそのほかの感覚から区別する〉との訳にとどまらせずに、〈情念〉の語に同格として修飾させた〈一方で... 外的対象に... 他方で... 身体に関係づけられる感覚〉なる語句を付すのは、これらの〈感覚〉を〈そのほかの感覚〉という〈感覚〉と等しい次元で語らせるためであった。いわば両方の〈感覚〉を同等に捉えおくことは前記もしたように、〈そのほかの感覚〉が〈(動物)精気の運動〉による〈情念〉であり得るだけでなく、〈外的対象に、身体に関係づけられる感覚〉も〈腺(神経)の運動〉によっ

て生じる〈情念〉になっていなければならないゆえである。なぜならいずれの場合であれ、〈On les(passions)peut aussi nommer des sentiments, ... mais on peut encore mieux les nommer des émotions de l'âme (情念はまた感覚 (sentiments) と名付けることができる (し), ... もちろんさらに適切に精神の情動と名付け得る) (括弧内は筆者)〉⁽²⁹¹⁾ とされるからである。

次に、〈外的対象に、身体に関係づけられる感覚〉に〈痛み (douleur)〉の例があった。引用文②④と②⑤の〈痛み〉はしかし、②④では〈外的感覚と内的欲求 (内的感覚)〉という身体の〈感覚 (sens)〉として、②⑤では〈身体 (内的欲求)〉という〈精神 (âme)〉の〈感覚 (sentiment)〉すなわち〈情念 (passion)〉として記されていた。〈外的感覚〉や〈身体 (内的欲求)〉での各〈痛み〉にはたとえば、人が〈外的対象〉である悲惨な出来事に立ち会って感じる精神的〈痛み〉が、胃痛たる身体 (肉体) 自身の引き起こす〈痛み〉があつたりする。精神的〈痛み〉はむろんのこと、身体 (肉体) 的〈痛み〉もときに〈情念〉までの高まりをみせて語られるかぎり、この「胃痛」の例は、〈身体 (内的 (sens))〉が〈精神 (âme)〉ともみなされる〈腺〉や〈脳本体〉でそれぞれ、〈sentiment〉や〈passion〉という各〈痛み〉であることを示唆させるし、そこから〈sens〉次いで〈sentiment〉や〈passion〉の一連のつながりをもって、身体と精神を関係させる、いわゆる《心身合一》がみられることの証しとさえなるわけである (〈心身合一〉については次号でこの項を立てて言及する)。

そして、その〈痛み〉のことで気にかかるのは、〈内的欲求〉としていう〈痛み〉は、果たして〈欲求 (appétit)〉に寄与するのか、あるいはこの〈神経の運動〉による〈内的欲求 (内的感覚)〉は、〈(動物) 精気の運動〉による、前号引用文②③⁽²⁹²⁾ 中の〈あらゆる欲求〉に、また本稿引用文②⑤でいえば、〈そのほかの感覚〉に含まれ捉えられるかどうかということである。〈欲求〉には少なからず〈意志〉がからむとみる。だから〈欲求〉は〈意志〉なくば〈欲求〉でなくなろう。さらに人が〈痛み〉に積極的に「働きかけ (意志し)」て、その〈痛み〉を受け入れるとも考え難い。しかしながら、〈痛み〉なる〈内的欲求〉が〈あらゆる欲求〉に含まれると指摘し得るならば、本稿引用文②⑥に書かれる通り、その〈情念〉にまで高まる〈内的欲求〉は〈意志〉にかかわらなくなろうとされる。

別言すると、〈痛み〉に代表される〈内的欲求〉が〈あらゆる欲求〉の一に加えられてこそ、〈意志〉の助けのない〈情念〉になるとみておかねば、〈あらゆる欲求〉の語句は何んのために記されたのか分からなくなるし、およそこの〈内的欲求〉すらかの〈(動物) 精気の運動〉にかかわりなくさせてしまうであろう。だが問題は当の〈内的欲求〉が〈あらゆる欲求〉もしくは〈そのほかの感覚〉に含まれると断じるは何ゆえなのかである。

〈あらゆる欲求〉や〈そのほかの感覚〉で予想されることは、これらが〈(動物) 精気の運動〉に関連する〈欲求〉や〈感覚〉であることにあった。だから〈内的欲求〉である〈痛み〉を〈あらゆる欲求〉の一としたことは、この〈痛み (内的欲求)〉を〈(動物) 精気の運動〉において質することになる。ただしその前に、筆者は身体内外諸器官で〈痛み〉を〈感覚する (ressentir)〉こと自体がすでに〈意志〉した〈能動〉であると結語するとともに、この〈内的欲求〉は身体の〈sens〉の段階では〈神経の運動〉として生じていたと断わりおく。

とまれさし当たって、〈(動物) 精気〉とは何んであったか想起されるべきであり、これに関与した問題の解答を明解に浮き上がらせておくべきである。デカルトは〈(動物) 精気〉を〈血液〉であり、その〈粒子〉であると説いた⁽²⁹³⁾。〈心臓〉を中心にして身体を循環するなかで、〈心臓から脳へとほる動物精気〉⁽²⁹⁴⁾ (の〈運動〉) は、〈脳にあ (入) って〉〈細かな粒子と粗い粒子〉⁽²⁹⁵⁾ になり、たとえばこの場合での〈痛み〉なる〈内的欲求〉と〈混交 (mélange)〉⁽²⁹⁶⁾ すると、要するに〈脳に入っ) た〈血液〉やその〈粒子〉である〈動物精気〉に、〈神経の運動〉下の〈内的感覚〉としての身体の〈sens〉が混じると語られる。いや彼が語るというより、筆者はそのように読まざるを得ない。それ以外に、彼の主張する〈腺 (神経) の運動〉によるだけでない、筆者にいわせると〈意志 (能動)〉の関与だけではない、〈動物精気の運動〉に伴う身体の〈sens〉の、〈受動〉⁽²⁹⁷⁾ としての〈情念〉が、引用文^{②⑤}^{②⑥}や註 (291) のそれぞれの〈âme〉 (この〈âme〉は〈脳本体〉であり、〈理性的精神〉である) に誕生されはしないのである。

そこでさらに問題となるは、〈内的欲求 (内的感覚)〉の〈痛み〉ばかりでなしに、〈外的感覚〉の〈痛み〉さえ、ときおり〈脳に入って〉から、〈動物精気〉

と〈混交〉することがあるのか否かである。これへの答えは前段註(297)の引用文③に記されもするから、「ある」といわねばなるまい。〈神経の運動〉のもとに生じる〈内的感覚〉と同様、その〈外的感覚〉も〈動物精気〉と〈混交〉するとみられる場合とはいかにあることをさすかは、ここでは、前段の内容を前提に導き出されるというだけにして、〈動物精気〉との〈混交〉の「ない」場合がどうなるかを確認しておこう。何度もいうが、「ない」場合、〈外的感覚〉や〈内的感覚〉たる身体の〈sens〉が、まずは〈脳〉中の〈腺〉に、そしてときに〈腺〉から〈脳本体〉に「受容」されては、各部位にて〈sentiment〉や〈passion〉になるほかなかった。さすれば「ある」場合、その身体の〈sens〉が〈passion〉になる〈脳〉の部位を、「ない」場合と同じく〈脳本体〉に見定めおくことができるとしても、しかし〈腺〉に「受容」されるとみてしまうと、それこそ「ない」場合に相当するのだから、身体の〈sens〉は〈脳本体〉にとどく前には、少なくとも〈脳〉中の〈腺〉以外の部位に伝達されるしかならうということになる。この部位とはどこか。

身体の〈sens〉が〈脳〉中のいかなる部位で〈動物精気〉と〈混交〉し得るのかを予想するとき、筆者は前号註(265)⁽²⁹⁸⁾で引用した文章を再度用い検討せずにおれない。それは〈Elles (passions) sont principalement causées par les esprits qui sont contenus dans les cavités du cerveau (情念は主に、脳の凹みに含まれる動物精気によって引き起こされる) (括弧内は筆者)〉という引用文であった。もちろん〈動物精気(血液)〉は〈脳〉中のどんな部位にも流れるであろうが、しかしデカルトがなかでも〈脳の凹み〉に〈動物精気〉を〈含む(入れる)〉と書き込むは特記以外の何ものでもないとみえるのだから、筆者はこの文章に注目せざるを得なくなる。それに〈脳に入って〉も〈腺〉に向かわない身体の〈sens〉は前記した通り、〈動物精気(の運動)〉とかかわらねばならないと述べたのだから、〈動物精気〉が彼にあってわけても〈含まれる〉とした部位〈脳の凹み〉に伝わることになる。こうして、〈脳の凹み〉ではまだ〈情念〉に成るとはいえない(〈情念〉が成る部位は〈脳本体〉であった)ところの身体の〈sens〉はその〈脳の凹みに含まれる動物精気〉に〈混交〉するしかなくなるわけである。要するに彼は、〈脳〉のなかで〈動物精気(血液)〉と〈神経の運動〉でも

たらされる身体の〈sens〉とが会うのが、この〈脳の凹み〉の部位を措いてほかにないと主張するのである。

それでもデカルトの主張はさらに、〈動物精気〉と身体の〈sens〉が〈脳の凹み〉において出会うとするのみで、ことを終わらせるはずがない、たとえば〈脳の凹み〉での〈混交〉によって、そこから今度は〈脳本体〉に、註(297)で記した〈受動〉として生じさせよう〈情念〉のための、何らかの役割を〈脳の凹み〉に背負わせることを含意させていたとみておくべきなのである。別言すると〈脳本体〉とは別の部位である〈脳の凹み〉の役割として、〈脳の凹み〉は〈脳本体〉での〈受動〉としての〈情念〉を産出させるべく、身体の〈sens〉を何にするのかということである。身体の〈sens〉は、〈脳の凹み〉で〈動物精気〉と〈混交〉するがゆえに、たんに〈神経の運動〉だけによって、〈腺〉を例にしていうところの、〈能動〉としての〈sentiment〉にはなりようがないのは当然であるとみるにせよ、だからといって〈混交〉しても何らかの変化もなしに、身体の〈sens〉のままに〈脳本体〉に流れ(伝わり)ゆくのか。彼はそうではないという。しからば身体の〈sens〉は〈脳の凹み〉でどうなるのかである。

筆者がこの疑問を解くに際しては、既出引用文⑳⁽²⁹⁹⁾を再度利用する必要がある。すなわち〈Je ressentais en lui (corps) et pour lui (corps) tous mes appétits et toutes mes affections (わたしは、あらゆる欲求とあらゆる感情を身体のうちに、しかも身体のために感覚していた)(括弧内は筆者)〉という文章で解くことが肝要になる。ところが上記引用文には一切、身体の〈sens〉と〈動物精気〉のこと、その〈混交〉のこと、まして〈脳の凹み〉のことが触れられてはいない。だが同時にこの文章にこれらのことを当てはめ読まずに、〈あらゆる欲求(appétits)とあらゆる感情(affections)〉がそれ自体、なぜここにこのような能力として書かれねばならなかったか、また一体何から、どこで生まれるのか、皆目見当のつかぬままに浮き上がってしまうといえるのも事実なのである。

こうした能力はデカルトに〈ressentir〉とともに記されて存するわけだから、「何から」とは、この〈ressentir〉が〈動物精気(血液)〉の〈粒子〉に〈混交〉した身体の〈sens〉に「働きかける」こと(から)をさす以外に、〈あらゆる欲求と感情〉は生じないのである。繰返すが、〈ressentir〉は身体の〈sens〉を産

出させるうえで「働きかける」能力であったし、前段引用文②③において、身体の〈sens〉は新たにこの〈ressentir〉によって、〈あらゆる欲求〉や〈あらゆる感情〉という各能力にもならねばならぬことを明示する。また「どこで」とは、身体の〈sens〉と〈動物精気〉の〈混交〉を可能にする〈脳〉の一部位〈脳の凹み〉であるほかない。〈脳の凹み〉といえるは、これが〈脳〉中で〈身体のうち〉に、しかも身体のために〉となる部位でしかないからである。彼が他で取り上げた〈脳〉中の部位、たとえば〈腺〉や〈脳本体〉はどうであったか。おのおのはときおり〈精神 (âme)〉と説かれていたではないか。かつそれぞれでの〈sentiment〉や〈passion〉は上記引用語句に真似て、「精神のうちに、しかも精神のために」あるとあってよい能力ではなかったか。これらのことに比べ、まず〈脳の凹み〉はそこで〈動物精気〉と〈混交〉した身体の〈sens〉に〈ressentir〉を関与させる以上、つねに身体とみられるのであって、〈精神 (âme)〉に置換されるなどは一度足りともない。そしてか〈脳の凹み〉に産出する〈あらゆる欲求と感情〉も、身体内外諸器官で各産出しよう身体の〈sens〉と同じく、〈脳〉中における身体の諸能力とみるほかなくなるのである。

この身体の諸能力を含んだ〈動物精気〉は〈血液の粒子〉がゆえに、〈脳本体〉の〈神経〉へではなく、〈les pores du cerveau (脳 (本体) (という理性的精神) の孔)〉³⁰⁰⁾ に流れゆくと察知する。そこで〈あらゆる欲求と感情〉を含んだ〈動物精気〉が〈脳本体の孔〉に流れゆく際、デカルトが引用文②⑥の冒頭文章で、〈情念が動物精気の何らかの運動に引き起こされ、持続され強められる〉と記すのを踏まえると、〈情念〉が〈引き起こされ、持続され強められる〉には、〈動物精気〉自身の、前号註 (266)³⁰¹⁾ に記される〈不規則な振動と精気諸部分の多様性〉という〈何らかの運動〉が〈脳本体の孔〉にとどいてからか、それとも〈脳の凹み〉内の〈血管〉から生じるかは分からぬ (〈持続され〉とも語られる以上はすでに〈脳の凹み〉からかも知れぬ) が、〈脳本体の孔〉まで伴われていると読み得る。そして〈脳本体 (の孔)〉にて〈動物精気〉に含まれる〈あらゆる欲求と感情〉が〈情念〉になるとされるから、〈情念〉は〈脳本体 (の孔)〉側よりみれば、既出引用文③³⁰²⁾ の〈精神から生じるいかなる能動もなしに〉 (ここでいう〈精神〉は〈脳本体〉なる〈理性的精神〉であるととも

に、〈能動〉とは〈vouloir〉をはじめとする、〈理性的精神〉の「先天的」諸能力が「働きかける」ことをさした、換言すると同引用文の〈意志の協力なしに〉、または本稿引用文②⑥の〈わたしたちの意志から区別〉させて産出されよう〈受動 (passion)〉にしなければならないわけである。

〈受動〉としての〈情念〉の端緒は何度でもいうが、本稿註(298)での〈情念は主に、脳の凹みに含まれる動物精気によって引き起こされる〉にあった。だからして、この〈情念〉は〈脳の凹み〉(内)で成らないことだけは確かなのだ。〈脳の凹み〉では〈動物精気〉と〈混交〉した身体の〈sens〉が〈ressentir〉なる〈能動〉の助けを借りて、そこで〈あらゆる欲求と感情〉に成ることをたんに含意させるのみである。そのことを今一度〈感情 (affection)〉で簡単に振り返ってみよう。〈動物精気〉といっしょになった身体の〈sens〉が〈脳〉中の〈脳の凹み〉で、本稿引用文②⑤の〈そのほかの感覚 (sentiments)〉の一に、すなわち〈affection〉に成るは、〈ressentir〉がその身体の〈sens〉に「働きかけ」たからであった。それゆえ、〈理性的精神 (脳本体)〉の「先天的」諸能力の一とみた〈ressentir〉が〈神経を介して〉、身体内外諸器官での内外諸「対象」に「働きかけ」ては、身体内外諸器官に身体の諸〈sens〉すなわち身体の諸能力を産出するのと同様に、〈脳の凹み〉での身体の内外諸〈sens〉に「働きかけ」て、〈脳の凹み〉に〈あらゆる欲求〉や、ここでいう〈あらゆる感情 (affections)〉たる身体の諸能力を産出するのは、〈脳の凹み〉自体が〈精神〉でなくして、〈脳〉とどのつまり身体であると捉えられるところにしかなかった。それを示唆させるのが既出引用文②③⁽³⁰³⁾でもあったし、そもそも〈神経〉を經由する〈ressentir〉が〈脳〉で「働きかける」とすれば、〈腺〉や〈脳本体〉に各対する〈神経〉だけの「働きかけ」を除いて、〈ressentir〉が〈動物精気 (血液)〉と〈混交〉して「働きかける」部位は、〈脳の凹み〉以外にないといえるのだから、〈ressentir〉が〈脳の凹み〉に関係すると断じても不思議ではなからう。

このように、身体の〈感覚 (sens)〉から発する〈あらゆる欲求 (appétits)〉と〈あらゆる感情 (affections)〉すなわち〈そのほかの感覚 (sentiments)〉も〈情念 (passions)〉に関連するといえるとき、当の身体の〈sens〉には〈痛み (douleur)〉たる〈内的欲求 (内的感覚)〉が充当させられるばかりでなく、この〈痛み〉を

はじめ、たとえば〈香り、音、色〉たる〈外的感覚〉さえ組み込まれて、〈あらゆる欲求と感情〉や〈情念〉にまで高まりをみせるように捉えられはしないかどうか最後に明確にされる必要がある。筆者はすでに、〈外的感覚〉も〈神経の運動〉にかかわるほか、〈動物精気の運動〉によっても〈内的感覚〉と同じく、〈あらゆる欲求と感情〉や〈情念〉に成るとみてきた（〈脳の凹み〉で〈動物精気〉と〈混交〉したこの〈外的感覚〉に〈ressentir〉が「働きかけ」て、〈あらゆる欲求と感情〉を生み出すのも、また〈外的感覚〉を素材にした〈あらゆる欲求と感情〉が〈脳本体（の孔）〉で〈受動〉としての〈情念〉を生み出す経緯も〈内的感覚〉と同様であるが、それでも内外〈感覚〉がそれぞれ、〈欲求〉か〈感情〉として成るかは定かになっていない）ゆえに、ここではそれを証す引用文が掲げられるだけで十分である。

②⑦ Il paraît... que toutes les mêmes (passions) peuvent aussi être excitées par les objets qui meuvent les sens, et que ces objets sont leurs causes les plus ordinaires et principales. ⁽³⁰⁴⁾ (括弧内は筆者)

あらゆる情念はまた、感覚を動かす対象によっても引き起こされ得るし、こうした感覚の対象が、情念のもっとも普通なもっとも主要な原因であるそうだ。

〈感覚を動かす対象〉はと引用文②⑦を一見しただけでも、この〈対象〉は身体内外諸器官で身体の〈sens〉にさせられた。だから〈あらゆる情念〉がその身体の〈sens〉によって生み出されるは当然だし、かつ〈あらゆる〉と書かれるがゆえに、〈神経〉や〈動物精気〉の各〈運動〉に従われる〈外的感覚〉ならびに〈内的感覚〉を含ませるごとくに理解されていなければならぬわけである。むろん、身体内外諸器官で各産出し得た内外〈感覚〉（身体の〈sens〉）が〈神経の運動〉に助けられながら、〈脳に入って〉〈脳の凹み〉なる部位で〈動物精気（血液）〉とはじめて〈混交〉するからして、〈脳の凹み〉中の〈動物精気〉は身体の〈sens〉たる、〈内的感覚〉はおろか、〈外的感覚〉をさえ有さずにおれな

いのであり、ここからも〈外的感覚〉が〈神経の運動〉による〈sentiment〉や〈passion〉のほか、〈動物精気の運動〉による〈あらゆる欲求と感情〉（〈そのほかの感覚 (sentiments)〉）や〈情念〉の〈原因〉になることを明らかにさせるわけである。

要するに、〈神経〉や〈動物精気〉の各〈運動〉による諸能力を〈情念〉の方からみれば、〈情念〉は、引用文②⑦に〈あらゆる情念〉と語られる通り、その内外〈感覚〉（身体の〈sens〉）であったと同時に、註（291）では〈（情念はまた）感覚 (sentiments) と、... 精神の情動 (émotions de l'âme) (引用文②⑥にもこれと同様な語がある) と名付けることができる〉とされるのだから、身体の〈sens〉をして、〈神経〉に参与した〈腺〉で〈sentiments〉を、〈動物精気〉と参与した〈脳の凹み〉で〈sentiments〉すなわち〈あらゆる欲求と感情〉を、〈脳本体〉で〈神経〉による〈能動〉としての、また〈動物精気〉による〈受動〉としての各〈情動〉すなわち各〈情念〉を生み出させたにちがいないということである。

さて前段註（291）として記した文章は、〈精神〉の〈vouloir〉などが「働きかけ」では産出する〈能動〉としての〈情動〉すなわち〈情念〉であり、同註の文章の括弧内に付した引用文②⑥からは、これが〈受動〉としての〈情動〉すなわち〈情念〉であることを読み取らせるが、〈情動〉すなわち〈情念〉にはそうした違いがあるのを諒解するほか、〈情念はまた感覚と... 情動と名付けることができる〉とは、とどのつまり〈感覚〉のことはともかく、〈情動〉すなわち〈情念〉とはどのように理解され得るか、〈受動〉としての〈情動〉すなわち〈情念〉を示唆させる次の引用文が参考になる。

②⑧ Elle (âme) peut aisément surmonter les moindres passions, mais non pas les plus violentes et les plus fortes, sinon après que l'émotion du sang et des esprits est apaisée. ⁽³⁰⁵⁾ (括弧内は筆者)

精神は、もっとも弱い情念に（対しては）容易に優勢になり得るが、もっとも激しく強い情念に（対しては）、血液や動物精気の情動（興奮）が静まるまでは優勢になることができない。（括弧内は筆者）

〈激しく強い情念〉は〈血液や動物精気の情動（興奮）〉であると読み得る、上記引用文⑳からすれば、〈情念〉はこの〈情動（興奮）〉により〈激しく強くなる〉のだから、当然〈情動（興奮）〉なしに生まれてはこないであろう。だからデカルトが〈情動〉のあることを〈情念〉と並び立たせ明示しようとも、〈情念〉と〈情動〉は「すなわち」となって結びつくし、二つの能力の〈激し〉さや〈強〉さに多少差が出るにしろ、〈激し〉さや〈強〉さとの表記には変わりがない以上、似かよう能力、同じような能力とみてかまわぬであろう。だが同時に、その差は引用文㉑では、平常（普段）の〈精神〉に対する差にちがいないと受け止められるが、しからばこの〈精神〉の〈優勢〉さを楯に比べられる〈情念〉や〈情動〉の〈強〉さ〈弱〉さの測定や判定は何を基準とするかが聞こえてこないのも確かなのである。「何」はデカルト本人（の精神）に、あるいは筆者（の精神）に充当するやもしれぬし、しかもその〈強〉さ〈弱〉さは多くの人（の精神）によってさまざまであるほかならう。

筆者はまた、〈情念は…精神の情動と名付け得る〉という註（291）において、〈情動〉も前段での〈動物精気の運動〉の場合と同じく、〈情念〉の別名を有し、引用文㉒の〈あらゆる情念〉の一に与すると知ったがゆえに、一方に〈神経の運動〉による、〈能動〉としての〈情動〉すなわち〈情念〉が窺えるとした。この〈情動〉すなわち〈情念〉はさらに、〈tous les changements qui arrivent en elle(âme)（精神のうちに生じるあらゆる変化）（括弧内は筆者）〉⁽³⁰⁶⁾であり、〈de toutes les sortes de pensées qu'elle(âme) peut avoir, il n'y en a point d'autres qui l'agitent et l'ébranlent si fort que font ces passions（精神が持ち得るあらゆる種類の思惟のうち、情念ほど強く精神を揺り動かし、ぐらつかせるものはない）（括弧内は筆者）〉⁽³⁰⁷⁾と記されるが、しかし〈情動〉や〈情念〉として〈強く精神を揺り動かし、ぐらつかせる〉ほどの〈変化〉を現出させるは、〈神経の運動〉の場合にあって何かである。そこで問われるのは、〈腺〉から〈脳本体〉に伝えられる〈sentiment（感覚）〉が、また〈感覚〉に対する〈vouloir〉などの「働きかけ（能動）」が〈強く〉〈変化〉するのかわけであり、「何か」は当然、〈感覚〉か〈能動〉の能力かになるろう。だがデカルトは両方の、いずれの能力が〈変化〉するのか明確にしていないし、そのうえこの場合〈動物精気（血液）〉は関与しない

のだから、どうすれば〈情動〉や〈情念〉が〈強く〉〈変化〉するのかみえてこない。さらにこの〈神経の運動〉の場合でも、彼はなぜ〈情念〉のことだけでなく、〈情動〉を持ち出したのか、もしや〈情動〉を〈(神経の)興奮〉と受け取らせるべく意図したのか(後に私見を述べる)、それならばこの〈興奮(情動)〉がいかにして〈強く〉なることにつながるか、いかなる〈強〉さで〈情念〉になるのかを説くべきなのに、筆者の読み不足のせいも、分からぬままに終始させるのである。

デカルトのいう〈神経の運動〉と〈動物精気の運動〉に関して、ここで今一度振り返るに、前者では、身体内外諸器官で生まれ、〈腺〉の〈神経〉に伝達された身体の〈感覚(sens)〉をして〈腺〉が〈感覚(sentiment)〉を、その〈sentiment〉をして〈脳本体〉が〈情動(émotion)〉すなわち〈情念(passion)〉を産出せしめた各段階において、〈腺〉は〈精神(âme)〉と、〈脳本体〉は〈理性的精神(âme raisonnable)〉とみなされたし、「日常的用法」での〈精神〉は、たえずいずれかの〈âme〉で表記され(その見定めは〈理性的精神〉と明記されるこの語を除き、筆者をもたつかせた)、両方同時に立つことがないからして、シモーヌ・ヴェーユのいうように、彼の〈巧みな企て〉を代表しよう一例となる。ただし、「先天的」諸能力が「働きかける」〈能動〉の役割を引き受けるべき〈精神〉は、ことの初めから〈理性的精神〉としてしか用いられなかったということである。

後者つまり〈動物精気の運動〉では、〈神経の運動〉によって〈脳〉に伝えられた身体の〈sens〉が〈脳〉中の、〈腺〉にではなく、〈脳の凹み〉に入り、そこで〈動物精気(血液)〉と〈混交〉し、そのうえ〈理性的精神〉から〈出〉た「先天的」能力〈ressentir〉が身体の〈sens〉に「働きかける」とき、〈脳の凹み〉は〈あらゆる欲求(appétits)とあらゆる感情(affectations)〉を産出させた。その際、〈脳の凹み〉は一度も〈精神〉と語られることがなく、つねに身体(の一部)と捉えられるために、〈脳の凹み〉に「働きかける」能力にも身体内外諸器官に対するそれと同様、〈ressentir(感覚する)〉が適用された。さらに〈脳の凹み〉に産出された〈あらゆる欲求と感情〉が〈脳本体(の孔)〉に流れゆき、そこで引用文⑳の〈血液や動物精気の情動(興奮)〉に立ち会うとき、〈受動〉

としての〈情動（興奮）〉すなわち〈激しく強い情念〉が生み出されることにあった。〈脳本体〉とは〈理性的精神〉をさした（その〈孔〉については次号以降に譲る）。したがって〈動物精気の運動〉の場合の〈精神〉は（引用文⑳の冒頭語をみよ）、この〈理性的精神〉以外に該当されはしなくなるし、当然〈動物精気〉とかかわる引用文㉔の、〈神経の運動〉に関連する註（291）の各〈精神の情動〉というなかでの〈精神〉も〈理性的精神〉を示唆させるほかなかるう。

また前段の〈血液や動物精気の情動（興奮）〉の〈血液や動物精気〉たる各語の併記は、筆者がすでに〈動物精気〉を〈血液〉と置換させていたことを訂正せねばならぬのか。そうではない。まず〈動物精気〉が〈血液〉と捉えられるは、何を措いても確かなことである。それでもここでその〈血液〉以外の当の語が記されるから、〈動物精気〉は〈血液〉だけを中味にするのではなくなる。もはや周知のごとく、引用文㉔にいうこの〈動物精気〉は、〈血液（の粒子）〉に〈混交〉した能力を、換言するとたんなる〈血液（の粒子）〉でなしに、能力の含まれた〈血液（の粒子）〉をささずにおかない。そして〈動物精気〉の中味である能力を、筆者は身体の〈sens〉や〈あらゆる欲求とあらゆる感情〉になるのではないかとみる。不正確な答えにならざるを得ないのは、〈動物精気（血液）（の粒子）〉とかの能力の〈混交〉が、身体の〈sens〉が〈脳の凹み〉に入った段階でか、それとも〈あらゆる欲求と感情〉の産出後の段階で可能となるのか、今一つデカルトより読み取れずにいるからである。ただ筆者は上記で「身体の〈sens〉が〈脳の凹み〉に入り、そこで〈混交〉」し、そのあと〈混交〉した〈動物精気（中の身体の〈sens〉）〉に〈ressentir〉が「働きかけ」て、〈あらゆる欲求と感情〉をもたらすと語っていたのだから、前者（の段階）を肯定したことになる。すると〈脳の凹み〉としての「新たな能力」は〈あらゆる欲求と感情〉だけなのに、そこになぜ「新たな能力」ではない身体の〈sens〉が書き加えられねばならないのか。それは身体の〈sens〉に〈ressentir〉が「働きかけ」ない場合を想定しておく必要があり、この場合、身体の〈sens〉のまま〈動物精気〉とともに〈運動〉するからである。したがってこの身体の〈sens〉が〈脳の凹み〉の〈動物精気（の粒子）〉の一に残されるかぎり、「新たな能力」が産出されたあとで〈混交〉するとはいえなくなるのである。また身体の〈sens〉

や〈あらゆる欲求と感情〉(「新たな能力」)を〈混交〉させている〈動物精気〉はときに〈脳本体(の孔)〉に流れゆくであろう(〈脳本体〉でどうなるかはすでに語っている)が、それよりここに確認すべきは、先きの〈血液や動物精気〉なる表記中の〈血液〉は〈混交〉していない〈血液〉であるとともに、この〈血液〉も〈興奮(情動)〉を修飾するからして、〈理性的精神(脳本体)〉で〈激しく強い〉〈運動〉を伴わずにはおれないということにある。

そうであるならば、今度は〈神経の運動〉での〈情動〉とは何かを指摘するにあつて、筆者が〈神経の運動〉としての〈神経〉も〈情念〉産出の際に〈興奮〉すると先きに述べたことは確実になろう。註(291)の引用文にもう一度戻ってみよう。そこに〈情念はまた感覚(sentiments)と名付けることができる(し)、...もちろんさらに適切に精神の情動と名付け得る〉と書かれるために、〈感覚〉と〈精神の情動〉は、(あらゆる欲求とあらゆる感情)にかかわる〈動物精気の運動〉ではなく、〈神経の運動〉に従ってもたらされる能力と理解せざるを得なくなる。〈情念〉は〈脳本体(理性的精神)〉で産出されたからして、引用文に〈情念〉と等しく捉えられるとある〈精神の情動〉という語句中の、まず〈精神〉とは当然、この〈理性的精神〉であるほかない。そして筆者は以下に、そこでの〈情動〉とは〈神経〉の〈興奮〉であることを明かさねばならなくなる。それは、〈腺の表面〉に表出しない〈sentiment〉が〈脳本体〉の〈神経〉に伝達されたがゆえに、〈脳本体〉の〈神経〉をときに〈興奮〉させることが〈精神の情動〉(〈脳本体(理性的精神)〉(の〈神経)〉の〈興奮(情動)〉)になることにある。

しかしそこは、〈動物精気の運動〉に関してみたと同様な問題が生じている。すなわち〈興奮〉は果たして、筆者が前段で語った〈感覚(sentiments)〉が〈脳本体〉に伝わった段階でか、はたまた〈情念(passions)〉が成った段階で現出するののである。これに筆者が「ときに」と記したことを合わせ考えると、「ときに」は〈興奮〉がたえず起こるのではないことを示唆させるから、いずれの段階を答えにするかにあつて、筆者は前者であるというしかない。なぜなら〈感覚〉こそ〈神経〉が〈興奮〉するか否かにかかわると察知されるからである。〈興奮〉する〈神経〉中の〈感覚〉はその〈神経〉が〈興奮〉するだけで

〈情動 (émotions)〉に、かつ〈神経〉が〈激しく強い〉〈運動〉であれば〈情念 (passions)〉になるだろうが、しかし〈興奮〉しない〈神経〉中の〈感覚〉に対しては、何度も指摘する通り、〈脳本体〉の「先天的」能力〈vouloir〉などが「働きかけ」、もって〈情念〉を生み出すことになっていた。したがって〈情念〉を含んだ〈神経〉が〈情念〉として改めて〈興奮〉すると捉えたのでは、註(291)の引用文中の〈感覚〉と〈(精神の)情動〉がおよそ生きてこない(浮き上がる)だけでなく、デカルトが〈興奮〉しない〈神経〉のもとでの〈情念〉の産出に関与しよう例として打ち出す、前号の引用文⑳㉑や㉒⁽³⁰⁸⁾は一体何んのために記されたといえるか分からなくなるのである。

そこで筆者は、まずデカルトからの次の引用文⑳において、〈脳本体〉の「先天的」能力が〈神経の運動〉を通して、〈脳本体〉に入ってきた(そこへ〈神経〉によって伝えられた)〈感覚 (sentiment)〉に「働きかける」ことを今一度明らかにし、さらに㉒に記される、〈神経の運動〉による、別言すると〈動物精気の運動〉によらない〈affection〉について考察しておかねばなるまい。

⑳Comme, lorsque je veux, que je crains, que j'affirme ou que je nie, je conçois bien alors quelque chose comme le sujet de l'action de mon esprit, mais j'ajoute aussi quelque autre chose par cette action à l'idée que j'ai de cette chose-là; et de ce genre de pensées, les unes sont appelées volontés ou affections, et les autres jugements. ⁽³⁰⁹⁾

たとえば、わたしが意志し、恐れ、肯定し、否定するとき、わたしはなるほど確かに、(各「働きかける」)何らかの事物を、わたしの精神の能動の題材(対象)として理解しているが、しかしそのうえ、当の事物に隠れた何ものかをも、その能動によって観念に付け加えている。この種の思惟のうち、あるものは意志あるいは感情と、他のものは判断と呼ばれる。(括弧内は筆者)

上記引用文⑳は一見、筆者が今質している「日常的用法」からはみ出したよ

うに見える文章となる。なぜかは引用文中に〈esprit (精神)〉の語が使用されるため、これをば「日常的用法」用の精神と宛がうことができないからである。「日常的用法」の精神は〈脳〉中の、ときに〈腺〉や〈脳本体〉のそれぞれをさす〈âme〉や〈âme raisonnable〉という〈âme〉の語で表記されていた。それでは〈esprit〉は②⑨で〈真理の探求〉用の精神を表わすのか。なるほどこの用法の精神に〈esprit〉が使われるのは確かだが、②⑨の場合は否である。デカルトが精神の語に〈âme〉と〈esprit〉しか用いないにせよ、②⑨に〈âme〉と書かれぬ以上、これを論外にし得るは当然のこと、しかして〈真理の探求〉の精神でもないとみるがゆえに、否と答えたは〈真理の探求〉にあって、その〈esprit〉が②⑨にいう〈何らかの事物を、(また〈当の事物に隠れた何ものかを〉)わたしの精神 (esprit) の能動の題材 (対象)〉にすることはあり得なかったからである。換言すると彼にとって〈題材 (対象)〉となる〈何らかの事物〉や〈当の事物に隠れた何ものか〉に、〈わたしの精神 (esprit) の能動〉能力が、たとえば〈感覺する (ressentir)〉、〈感じる (sentir)〉、〈意志する (vouloir)〉や②⑨の〈恐れる (craindre)〉(または〈想像する (imaginer)〉)がそれぞれ「働きかける」ことや、だからおのおのの〈能動〉が産出する、身体の〈感覺 (sens)〉(または身体の〈想像 (imagination)〉)、精神の〈感覺 (sentiment)〉、〈情念 (passion)〉や②⑨の〈感情 (affection)〉(または精神の〈想像 (imagination)〉)という各「新たな能力」さえ〈esprit〉から排除されるということである。

しからば〈esprit〉なる語は、〈âme〉に代えられるべき誤植なのか。そうだとはいえられまい。すると引用文②⑨は何を語るのか。筆者は〈esprit〉が前段に記した〈事物〉と関連させられる例を引用文にして、次号でまとめて提示する予定でいるが、要は〈事物〉が、すなわち〈事物〉に「働きかける」「日常的用法」の諸能力が〈esprit〉とかかかわるとみる②⑨を、シモーヌ・ヴェーユのいう〈新しいデカルト〉⁽³¹⁰⁾の用法(とどのつまり〈真理の探求〉や「日常的用法」以外の用法)、筆者のいう「もう一つの真理の探求」の用法として、しかも②⑨に〈意志する〉などの諸能力や〈esprit〉の語が記されることでは、その精神での「知る作用のしくみ」を述べ語る一認識論として捉えることができる。だが〈新しいデカルト〉の用法の精神に〈esprit〉を当てるとは、この精神は、

〈真理の探求〉の〈〈esprit〉が脳と関係なく働きかけ得る〉⁽³¹¹⁾とされるのに比べ、どんな〈esprit〉と理解され得るか、まとめおく必要がある。

その際筆者は引用文⑳の〈観念 (idée)〉なる語に注意し、この語もまた「もう一つの真理の探求」の〈精神 (esprit)〉にかかわらざるを得ないとみるところから、ことを進める。㉑での〈意志する〉を例に再度いうが、この〈能動〉能力が、〈何らかの事物〉や〈当の事物に隠れた何ものか〉に「働きかけ」て、「新たな能力」たる〈観念〉を、彼の別の言い方によると〈意志〉、〈感情〉や〈判断〉という各〈思惟〉を産出させることで明らかのように、㉑はいわゆる《真理の探求》でめがけられる〈観念〉と、排除される諸能力（諸能力は、たとえばその一たる〈sentir〉の「新たな能力」の産出に不可欠な〈対象〉の〈何らかの事物〉や〈当の事物に隠れた何ものか〉に換言され得る）とを合わせ有する用法を示唆させるのである。

註(311)には、〈〈esprit〉が脳と関係なく (indépendamment) 働きかけ得る〉こと以外に、〈脳は純粋な思惟作用をなすときに働くのではなく、たんに何かを感じ (sentir)、あるいは何かを想像する (imaginer) ときに働く〉ということが記されていた。上記引用文は前記した通り、〈真理の探求〉の〈esprit (精神)〉の特徴を表わす。すなわち特徴は、〈脳と関係ない〉い〈esprit〉こそ〈純粋な思惟作用をなす〉と読み得るし、その〈esprit〉は〈何かを感じ、あるいは何かを想像する〉ことを除く能力（の〈能動 (働きかけ)〉）で成り立つとみるところにある。この能力とはいわずと知れたこと、〈理性 (知性, 悟性)〉である。〈理性〉(の能力)は〈純粋な思惟〉を、あるいはいわゆる《生得観念》をめざすからして、〈純粋な思惟 (生得観念)〉の獲得に対しては「日常的用法」での〈感じる〉や〈想像する〉各能力の手助けなど必要でないと同時に、理性自身をして〈思惟 (観念)〉、〈精神 (esprit)〉ならびに〈わたし〉⁽³¹²⁾にさえさせるといえるのである。(註(312) 註欄中に〈わたし〉とは〈une chose qui pense (思惟するもの)〉と記されるが、それでも〈une chose (もの)〉は〈真理の探求〉にあって、〈わたし〉を事物として捉えることにはない。別言すると〈わたし〉は身体ではないということである。だがデカルトが〈真理の探求〉の〈精神 (esprit)〉を考察する際に、〈外的対象 (事物)〉を、すなわち身体に関する諸能

力を排除したことを踏まえると、身体（に関する諸能力）の排除はそもそも、〈esprit〉を際立たせる対比に持ち出されるべき、彼の意図のもとでしか企てられなかったといえるのだから、彼には、身体が端から念頭にないことはない、要は〈真理の探求〉が観念論のみで成り立つとの指摘に収まらないことが、シモーヌ・ヴェーユにいう、〈両極端の観念論と实在論はデカルトにとって、たんに両立し得るだけでなく、相関的でもある〉⁽³¹³⁾ ことが〈真理の探求〉ですら認められざるを得なくさせる。そうみておかずに、彼があのように実験を重ね、今日も基本的に依拠してよいと判じる生理学的知見を『人間論』や『情念論』などに網羅し得た、〈实在論〉を代表させよう「日常的用法」は、もはや〈真理の探求〉に、まして「もう一つの真理の探求」に役立たないだけでなしに、それ自身当時の卓越した仕事にみえるにもかかわらず、これをもっと彼の「学説」の前面に押し出さないことには、彼女のいう〈巧みな企て〉の一にさえなり得ないと察知される。〈巧みな企て〉に「日常的用法」が加えられなければ、彼のその苦心が分からなくなろうということだけは確かなのである。

しかし先きに掲げおいた引用文⑳に、〈恐れる (craindre)〉や〈感情 (affection)〉なる諸能力が書かれるかぎり、㉑は到底、デカルトが〈真理の探求〉を明記させたとはいつてならない文章である。〈恐れる〉は「日常的用法」の諸能力の一でしかなく、〈何らかの事物〉や〈当の事物に隠れた何ものか〉を欠いて「働きかけ」ないし、〈感情〉という〈観念〉を〈真理の探求〉の〈esprit〉では、またその〈理性〉でも生み出せはしないからである。そこで筆者は既出引用文を利用し、そこに〈真理の探求〉における〈観念〉や〈理性 (知性)〉が何かを確認する必要があるし、そこから、〈真理の探求〉と「もう一つの真理の探求」のその各違いを明らかにさせねばならない。だが今回はすでに既出引用文を掲げる余裕すらないために、上記中の「確認」や「証明」は次号に回すほかなく、しかも今問題にしている㉑の〈affection〉は本来上記した、「もう一つの真理の探求」の用法があることを打ち出す際に言及するのが筋であろうが、筆者はこれを省き、拙論の最後に、㉑の〈affection〉に関し結語するだけにした。

上記の問題に対し、㉑の引用文中には〈mon esprit〉や〈idée〉の語が書かれ、さらに〈idée〉をして〈外来観念〉たる〈affection (感情)〉を示唆せしめるか

らして、〈感情〉は「もう一つの真理の探求」の用法に含まれる能力であると答えられる（「日常的用法」では精神は〈âme〉であり、〈âme〉は〈idée〉とは無関係である（次号参照）。その際②⑨は②⑥や②⑧のように、〈動物精気〉の語を記しはしないために、〈感情〉は、筆者が前号（補Ⅲ⑥）や本文ですでに語ったのとは違って、つまり〈神経〉中の内外感覚の〈脳の凹み〉への受容にて〈動物精気〉と〈混交〉し、②⑧の〈動物精気の情動（興奮）〉により〈脳本体の孔〉に流れては〈受動〉としての〈情念〉になるのとは違って、内外感覚の〈腺の表面に表出〉しない〈sentiment〉が〈神経を介して〉〈脳本体〉に伝えられ、〈脳本体〉でたとえば②⑨の〈恐れる〉先天的能力の「働きかけ」を受けて成る〈能動〉としての〈情念〉であるほかない（この両者は〈真理の探求〉では当然除外される）。後者での〈感情〉にはさらに、〈愛の対象〉を目前にして生み出された、〈外的感覚〉の〈sentiment〉に〈estimer（評価する）〉先天的能力が「働きかける」とき、〈愛情〉になる〈affection〉があるとされる⁽³¹⁴⁾。だが〈内的感覚〉も〈能動〉の〈愛情（情念）〉になる場合は、また内外感覚が前者でいう、〈神経〉から〈脳の凹み〉に伝わって〈愛情（情念）〉になる場合はないか。これらの〈愛情〉が②③の〈toutes mes affections（あらゆる感情）〉に含まれ、②⑨の〈idée（観念）〉としてある以上、両場合を想定すべきは当然だし、もって両場合を可能にさせるは「もう一つの真理の探求」の用法しかなく、そこではだから身体の〈感覚（sens）〉が欠けてはならなくなる。これは〈神経〉や〈動物精気〉を取り入れることで、〈脳〉である〈精神（esprit）〉を中核とする用法であり、その〈真理〉をこの人間の現実に見据え〈探求〉することにある。このとき〈理性（知性）〉がどう扱われるかも課題となろう。

〔続〕

註

以下の註の番号が (279) から続くのは、本稿が前号『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑥〕〕の脱稿と同時に書かれたものであるからである。

- (279) Simone WEIL 《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》 P.47, Gallimard.
- (280) 身体の〈imagination〉については、紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅱ〕〕同〔Ⅲ〕(新潟大学人文学部人文科学研究, 第106輯, 第107輯, 2001年)参照。なお本稿で身体の〈sens〉が整理されると同様に、機会を得て、身体の〈想像〉についてもまとめるつもりである。
- (281) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》 ART.13, P.702, Gallimard.
- (282) Ibid., ART.29, P.709.
- (283) 紀要『なぜ感受性なのか(4)』 P.P.53-54, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第95輯, 1998年, 参照。
- (284) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅴ〕〕 P.20, 引用文⑳とP.37, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第109輯, 2002年, 参照。
- (285) 紀要『デカルトにおける理性と感覚(4)』 P.68, 引用文㉑, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第101輯, 1999年, 参照。
- (286) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅴ〕〕 P.P.20-21, 引用文㉒とP.37, 参照。
- (287) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》 ART.29, P.709, Gallimard.
- (288) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑥〕〕 P.123. 引用文㉓, 新潟大学言語文化研究, 第10号, 2004年, 参照。
- (289) 同上P.124註(255)と註(256)参照。
- (290) 同上P.127引用文㉔参照。
- (291) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》 ART.28, P.709, Gallimard.
- (292) 註(290)参照。
- (293) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅰ〕〕 P.18, 引用文㉕, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第104輯, 2000年, 参照。
- (294) 同上P.18, 引用文㉖参照。
- (295) 同上P.P.18-19, 引用文㉗参照。

- (296) 同上PP.10-11, 引用文④参照。
- (297) 同上P.10, 引用文③(そこには前号引用文⑳㉑と㉒(本稿註(288)に記した紀要P.126)での〈能動〉によって産出される〈情念〉とは相違する, 〈受動〉としての〈情念〉のことが語られる。したがって引用文③の冒頭近くにある〈passion〉は〈受動〉と訳されるべきである。〈受動〉の〈情念〉がいかにして成るかは本文で後述する)参照。
- (298) 本稿註(288)に記した紀要P.125参照。
- (299) 註(290)参照。
- (300) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》ART.14, P.703, Gallimard.
(なお〈Pore (孔)〉については次号以降の紀要で〈trou (孔)〉とともに検討する予定である)。
- (301) 本稿註(288)に記した紀要P.125参照。
- (302) 本稿註(293)に記した紀要P.10参照。
- (303) 本稿註(288)に記した紀要P.127参照。
- (304) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》ART.51, (SECONDE PARTIE) P.722, Gallimard.
- (305) Ibid., ART.46, P.718.
- (306) Ibid., ART.28, P.709.
- (307) Ibid., ART.28, P.709.
- (308) 本稿註(288)に記した紀要P.126参照。
- (309) René DESCARTES 《MÉDITATIONS》(troisième) P.286, Gallimard.
- (310) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕』P.P.27-28, 引用文㉔の㉕, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第112輯, 2003年, 参照。
- (311) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』P.22, 引用文㉖(また同〔Ⅳ〕P.3, 引用文㉗, 本文の訳は〔Ⅳ〕を利用した), 新潟大学人文学部人文科学研究, 第110輯, 2002年(同第108輯, 2002年)参照。
- (312) 同上〔補Ⅰ〕P.22引用文㉘(〈Je ne suis donc, précisément parlant, qu'une chose qui pense, c'est-à-dire un esprit, un entendement ou une raison. (それゆえ正確にいて, わたしとは思惟するもの, すなわち精神, 悟性, 理性でしかない)〉はまさしく〈真理の探求〉で語られることである)参照。
- (313) 同上P.P.17-18 引用文㉙参照。
- (314) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》ART.83, P.734, Gallimard.

〈Lorsqu' on estime l'object de son amour moins que soi, on n'a pour lui qu'une simple affection (人が自分の愛の対象を自分より低く評価するとき, 人はその対象に対してたんなる愛情 (affection) しかもたない)〉 参照。